婦人と子ども

第四卷第十二號

兵卒フリッヅ（つゞき）

やまとの翁

さて、時分時になりますと、お客様は殘らず集って來て、席につきました。其お客様は、前申した様に、みな立派な將校方でありますが、其中に、たゞ一

人、低ひ軍曹が見えて居ますから、お客樣の中には、こんな席に、何故、軍曹の樣な者が出て居るのだらうかと、不思儀に思ふ人もありましたが、しかし、一番、驚いたのは、軍曹自身でありました。

處で、軍曹の次に、も一つ皆が不思儀でならないものがある、夫は、テーブルの眞中にある、白い布を被せた大きな皿であります。皆の考では、何れ、此中には、價の高い、甘しい御馳走が這入ってるに違ないといふので、だれもかれも、何だらう〳〵といふ風に、其方ばかりを眺めて居ました。司令官は、其樣子に氣がついて居ますが、めい〳〵の想像に任したきり、何だといふことは一言も申しません。たゞ其皿を見ては、獨りで微笑として、そし

て、時々、側に居る副官と何か譯あり相に顔を見合はせて居るのです、不思儀がだん〳〵不思儀になって來ました。

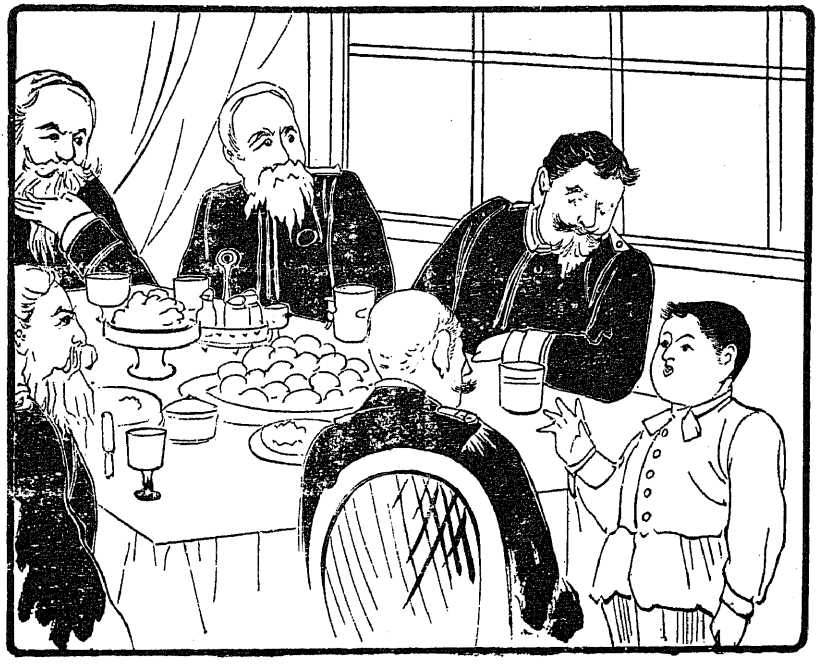
とう〳〵司令官は、大きな聲で、其皿の被を取り去るとを、軍曹に命じました。お客樣の眼は、一時に、其不思儀の皿に集まりました。さあ、何が出たでしょー。皮の儘の馬鈴薯でした、しかも、實に奇麗で、甘し相に見えましたが、夫でも、平常から、美食になれたお客樣たちは、「オヤ〳〵」といったきり、一方ならず失望しました、まさか、馬鈴薯だとは思って居なかったからです。其中で、たゞ一人、心から嬉しかったのは、ボラマン軍曹でありましたらう。

「諸君、今迄はね」と、司令官は、口唇のあたりを、にこ〳〵さ

せながら、話し出しました。

「今迄は、諸君は、我輩のお客であったのだ、然し、此見事な馬鈴薯を食べたいといふ望なら、此處に居る、ボラマン軍曹のお客にならんければならん、これは、軍曹のものなんだから……」

此話を聞いて將校方は。さも不愉快相に、なんだ馬鹿馬鹿しいといふ風に、肩などい



からかして居りました、が、司令官は少しも、夫には氣をとめない様でして、次の様に話しつゞけました。

「然し、諸君、若し此馬鈴薯が、どういふ具合で、此處に來たかといふことがお分りになったら、諸君は定めし、たった一つ貰っても、非常な名譽に思ふに違ない。」

と申しますと、皆は一時に問ひました。

「閣下、夫はどういふ譯ですか、どうして來たといふのですか、どうか聞かして頂きたいもので……」

「我輩に話せといふのか、いゝや、折角だが我輩はとんと話が下手だから駄目だ、然し見た所、諸君といひ、バラマン軍曹も、前から、ひどく不思儀に思って居るらしいから、よし〳〵一つ、こ

〻に面白い仕方があるのだ　副官　君行って、一つ我輩の話し手を呼んで來てくれ給へ」副官は這入って仕舞ひました、何が出て來るのかと思って、皆一生懸命に、入口ばかり見て居ります。

前程から、バヲマン軍曹の胸は、張りさける程に騷いで居ります。と申すのは、此事について、一寸したらといふ、かすかな疑が、とけかゝり相になって來たからであります。夫で、バヲマンの顏色は、丸で赤くなったり白くなったりして、まあ、どんなに、司令官の眼が、絶にず鋭い注意を以て、自分を見て居るかといふことには、ちっとも、氣が付きませんでした。暫くすると、入口の戸が開いた、そして、副官に隨って、嬉し相にきょと〳〵見廻はしながら這入って來たのは、兵卒フリッヅでありました。

之を見た軍曹は、「オー、フリッヂ」と叫びながら、上官の前だといふことも忘れて、兩手を擴げながら前の方へ飛び出しました。「フリッヂお前、一體、どうして、此處までやって來たのだ、」すると、子供は夫には答へもしないで、いきなり、お父っあんの胸に顏をおしつけて大聲で泣き出しました。そして二人の親子は互に抱き合って泣いて居ります。すると將校方も、此不思儀な光景を見て、深い感動に打たれて居る、そして、司令官……親愛な善良な彼の司令官の兩眼には喜の涙が輝いて居ります。

暫くして司令官は、「さあ、いゝ子だ、皆にお前が此處へ來た譯と、どんなにして來たといふ話を聞かして上げなさい、然し、まあ、落ちついて、此卓子の側に座るがよい、さあもっとこっちへ來

て、何も天皇陛下のお側へでも來た樣に遠慮するには及ばぬ、お前の眞實の孝行によって名譽を得たのだ。」

夫から、フリッヅが、お父っさんの手を取って、咄をし始めると、將校方は、皆耳を立てゝ熱心に聞いて居ります。聞くに從って、皆の今迄の六ケ敷い樣子がだん〳〵親切相になって來て、其顏色も、だん〳〵和らいで來ました。そして、我兵士の子にお父っあんを慕って何百里といふ遠い道をやって來て、其上、こんなに甘しいものを持ってきてくれる者があるかと思って、もう〳〵嬉しくって〳〵たまらなくなりました。まして、年老った軍曹は、丸で氣でも違った樣に、笑ったり泣いたりして居りましたが、話がすむと、自分の周圍には、どんな人が居るといふことも忘れた

様に、フリッツを抱いて、いろ〳〵な事を尋ねますと、フリッツは、一々判明と答へて居ります。

しばらくすると、司令官の目配で、お客さん方は殘らず此室を出て仕舞ひました。そして後には、フリッツ親子丈けが殘って居ります。やがて半時間もたつと、司令官は、片手に大きな書き物と片手に澤山な金貨の入った袋とを持って這入って來て、

「バラマン軍曹、之をお前に上げる、之はもはや戰爭に出ないでいゝといふ免役狀だ、そしてそれには、お前の一生の恩給も付いて居る。夫から、此贈物は、お前の子供の爲にといって、吾々將校の集めた金なのだから、大きくなって其使ひ道が分るまで、お前預って置いてやるがよい、さ、今からすぐ其子をつれて家に歸

るがよい、かうして連れ立って歸れば、家ではどんなに喜ぶかも知れないだらう。」

「司令官閣下、此御恩は決して忘れません」と、軍曹は低い聲で申しました。「どうして、私はこんな恩惠を得たのでせう」

すると、司令官は嚴かに、

「第一、此度の戰爭中、お前の双びなき武勇と、第二には、先度の戰爭の時受けた負傷……この負傷に依ってお前は一生不具者となった……と、お仕舞には、お前の息子の兵卒フリッツに依って、此度の恩命を得たのだ。

息子のフリッツから推して考へると、お前はきっと、善良な父であるに違ない。して見るとお前の樣な人は、戰場で使ふよりも、

寧ろ家庭に於て父たる役を果させる方が、遙に我が國の爲になると思ふ。どうか、よく氣を付けて、殘りの子供も、皆此フリッヅの樣に、正直で、勇氣のある兵卒フリッヅの樣に育て上げてくれ。そして、フリッヅが大きくなって國家のため、銃を肩にする事が出來る樣になった時は、必らず、忘れないで、私の聯隊へ送ってくれ、これ丈けは、くれぐも賴んで置いたぞ。」

それから、バラマン親子は、此親切な司令官の許を辭して、無事に家へ歸って來ましたといふことであります。

（おしまい）